

## 郷土史検定修了書授与式の挨拶（要旨）

（前段省略）

郷土史検定は今回で15回になります。第1回目から公民館とガイドの会の協働という形で実施してきました。その背景には公民館主催の「ボランティアガイド養成講座」がありました。講座は8回ほどあり、野馬土手や俳句の話、ムルデルの話など。歴史を学んだことも流山本町も知らなかった私には、まったく理解できませんでした。初めは40人ほどいた受講生も、収入に繋がらない活動と知るや10名足らずになりました。私は旅行先でボランティアガイドにお世話になったことを思い出し、ガイドと郷土史に興味を持ちました。結局最後まで残った6人でガイドの会を立ち上げました。講座を理解できなかった私は知識のある同輩に叱責を受け、やり直しを命じられたりしました。

しかし、ふとしたことから郷土史本の間違ひを見つけたことから歴史に興味を持ち、疑問の解決が楽しくなりました。こうしてできたのが『利根運河を完成させた男—2代目社長志摩万次郎伝』です。流山の歴史の中に埋もれていた人物の再評価は、流山の歴史を変えました。さらに、会員諸士と議論を重ね寺社をくまなく歩くことで、新たな郷土史を刻んできました。これまで4冊の郷土史本を発行し、さらに3冊の発行を企画しています。

ただ米寿を迎える身では思うに任せません。そこで88の手習いとばかり、いま話題のAIの活用を思い立ちました。AIとはどのようなものかと、初めに自分のことを質問してみました。答えは「流山で郷土史の調査研究をしている人です。インプットした知識をガイドや講演、本の出版に変換してアウトプットし、誰かに伝えることで世の中に役に立っている」と出てきました。なにか自慢話になりましたが、AIもゴマすりが上手なようです。

AIに教えられたことがありました。自分でも気が付かなかったのですが、インプットした知識は自分のためだけでなく誰かに伝えることで目的を達成する、誰かに伝え世の中の役に立つことで完結する、ということ。受講した皆さまも今回の講座でインプットした知識を誰かに伝えることを実行していただきたいと思います。それは身近な誰か、例えば子どもさん、お孫さん、友人知人などから始めていただくのがよいかと思います。そのことをお願いしましてご挨拶といたします。

2026・2・17

田村哲三